



理系学科の教職課程におけるインクルーシブな集団づくりを目指した授業の展開

瀧本, 知加

(Citation)

大学評価学会第16回全国大会 「様々な困難を抱えた大学生への授業づくり」, 公開企画1:1-8

(Issue Date)

2019-03-02

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005695>



理系学科の教職課程における インクルーシブな集団づくりを目指した授業の展開

東海大学 課程資格教育センター
九州教養教育センター
瀧本知加

はじめに

本報告は、報告者の勤務する東海大学九州キャンパスにおける教職課程の授業実践を紹介するものである。なかでも、困難を抱えた学生に対応するために、インクルーシブな集団づくりを目指す授業の展開について紹介する。

報告者は、福祉系の大学を出たあと、中学校の社会科および高等学校の福祉科において講師を経験している。また、青年期の職業教育を専門としてノン・エリートの青年の「学校から社会への移行」に関する研究を行っており、このような経歴が、授業者としての性質に大きく影響を及ぼしている。すなわち、大学教員として授業を行う、という視点だけではなく、福祉的観点や研究上の問題意識から学生を応援し、支える「支援者・伴走者」としての視点、また、実務経験者・教職課程教員として、学生に様々な要求を行う「教育者・社会人」としての視点、さらに、これらの相反する視点のベースに、お節介をやく「おばちゃん」のような眼差しでもって、学生を捉え、授業を行なっている。

以下では、本学教職課程の特徴や教職課程における授業の特徴等を整理した上で、具体的な学生の困難とそれらの学生に対応するための授業の工夫について紹介する。

学生の特徴「理系学科」「教職課程」

本報告で、対象とするのは、主に農学部を学生を対象とした教育実践である。本学農学部は、理系学科の中でも、女子学生が多く、さらに農業高校・総合学科からの進学者も少なくない。さらに、農学部（特に畜産）は数が限られており、熊本の地方のキャンパスではあるが全国から学生が集まり、それに加えて全国の東海大学の附属高校からの進学者も集まってくる。このように、本学農学部には「理系」のイメージに含まれないような多様な学生が存在している。農学部では、教育課程において実習や実験などが重視されており、さらに3年生以降は、配属される研究室で指導教官の指導のもと、研究活動を中心として過ごすこととなっている。学生相談の体制は、例年「心の健康調査」「レジリエンス調査」によって学生の状況を把握し、必要に応じてカウンセリングを行っているが、困難を持つ学生に対する教学組織・教員組織も含めた組織的な体制は構築できていない状況にある。

農学部の授業の中でも、本報告が対象とするのは、教職課程における授業である。農学部

では、高校農業・中高理科の教職課程をおいている。課程を履修する学生の中にも、農業高校出身者は多いが、最終的に免許状取得に至るのは30名程度である。さらに、教職課程においては、おおよそ履修推奨セメスタ通りの履修を推奨しているため、3年生以降は同学年が同クラスで授業を受けることになる。教職課程では、これらの学生に対して、教育学の専任教員2名で指導にあたっており、教員が履修者全員を把握することが可能である。

教職課程における授業の目標

言うまでもないが、教職課程は教員養成のためにおかれている課程であり、求められる到達水準が比較的厳密に定められている。すなわち、大学独自の水準ではなく、高校農業・中高理科の教員として求められる資質・能力を身につけさせることが求められている。本学九州キャンパスの場合は、養成段階(特に1~3年生)では「教育実習に行けるかどうか?」を具体的な基準として設定している。しかし、実際には、免許取得を目指す学生の学習要求(興味・関心・感動、多様性の伸長、キャリア発達など)と教員として求められる力(教科指導力、コミュニケーション、対応力など)には隔たりがあり、学生の学習要求を満たしながら、教員として求められる力も同時に身につけさせていく必要がある。これらの両者を実現していくためには、4年間の教職課程履修全体を見通すことが必要であり、「授業の工夫」だけでなく「課程運営の工夫」を通して学生を成長させるという視点が重要となる。

以上のような視点から、教職課程運営にあたっては、授業の工夫だけでなく、学生の成長をうながすような課程運営の工夫を行なっている。教職課程は4年間の履修を通して、自らの進路を主体的に選択したり、科目の履修を積みあげていくことによる達成感、成長の実感を持つたりするなど、履修を通して様々な学生の成長をうながすことができる。そのためには、セメスタごとのガイダンスの工夫や、個別の進路相談を丁寧に行なったり、科目間の関係性を意識し、連携したりすることが必要であり、意識的に学生の成長をうながす課程の在り方を追求している。具体的な授業の工夫に関しては後述する。

集団に着目する理由

授業の工夫、課程運営の工夫の中で等に意識しているのが「集団」の視点である。その理由は以下である。

①報告者が対象とするのは、エリート的な大学とは異なる、大衆的な大学における教職課程である。そこでは、競争によって、よりよい成果に到達するという方法よりも、学生同士の協同(助け合い)を促進することで、教職課程に求められる水準の到達を目指すというアプローチの方が学生たちの実態に即していると考えている。

②教職課程は、学科や教養科目とも異なる性質を持っている。例えば、教職課程は学科横断であり、普段は出会わない学生同士の出会いがあり、様々な動機によって課程を履修している。本学九州キャンパスでは、特に、3年目以降は一つのクラスとして、お互いの顔と名前を認識し、グループワーク等に取り組むことから、他では実現できない人間関係や先輩・後輩関係を築くことができる。

③教職課程は、職業教育でもあり、履修の過程で、自分の適性・個性について深く考えることができる。特に教員は、偏差値的な学力だけではなく、対象理解やコミュニケーションに関する力など、これまで重視されてこなかった多様な力を必要とする職業である。教職課程の中では、集団活動を多く取り入れることで他者や自らの多様な力を意識し、それを職業へとつなげていく思考を身につけていくことができると考えられる。

④前述したように、本報告が対象とする学生は多様であり、それら学生の学校経験や家庭背景はさらに多様である。なかには、いじめや不登校など、学校自体により思い出のない学生も少なくない。それらの学生に対して、受容的・共感的な集団の雰囲気や、集団活動を体験させることで、それら厳しい経験の捉え直しや、教師としての力につなげていきたいと考えている。

以上のような観点から、報告者は、授業や課程運営に関して「集団」を意識した実践を行っている。

多様な学生と集団

報告者は、現任校において、勤務を続ける中で、学生の中に①「要支援」の枠組みに入る学生、だけではなく、②「要支援」の枠組みには入らないが、授業づくりや課程運営において配慮が必要な学生が存在していると把握している。以下に、その概要についてまとめる¹。

①「要支援」の枠組みに入る学生

まず、発達障害など、社会的な面で障害を抱えている学生は、すでに学生集団や授業の履修を進める中で、何らかのケアが必要と認識されやすいといえる。つまり、コミュニケーションに困難がみられたり、グループワークに参加できない、独特の行動(繰り返し行動)が見られたり、など、本人からの支援の必要性について訴えがなくても、周囲が気づくことができる場合が多い。しかし、周囲が気づいていたとしても、本人から支援の要請がないために、積極的な支援がはばかれることもあり、自らの「困り」を周りに伝えることができず、不適切な行動に繋がったり、不適切な行動がさらなる混乱に繋がったりする傾

¹ 本報告で紹介する学生の実態については、報告者の授業者としての主観的な理解にもとづくものであり、心理学的・教育学的見地からの科学的な分析とは異なる。

向がある。

次に、適応障害や不安障害、パニック障害など、社会生活上の困難をもっている学生は、周囲からみて、授業などに熱心に一生懸命取り組む場合が多く、周囲からはケアが必要だと認識されづらい面もある。特に、教員からみて一生懸命で熱意ある学生と認識されてしまうことにより、教員の過剰な期待や、不適切な言動を受けることもあり、それらを本人が受け止めきれない場合には、ストレス要因として授業への参加が困難になる可能性もある。このような学生は、鬱症状が強まったり、他の精神疾患にもつながることもあるので、継続的なカウンセリングや通院等で状況を見守っていくことが重要であると考えている。

「要支援」の枠組みに入る学生もまた多様であり、障害名と症状や結びつかない場合もあるため、安易に障害・疾患をベースとして支援を行うのではなく、障害・疾患への理解は補助的なものとして、多くの情報を集めながら、一人一人の学生の状況を的確に捉え、教育・授業へとつなげていくことが重要であると考えている。

②「要支援」の枠組みに入らない学生

「要支援」の枠組みに入らないが、配慮が必要な学生の中には、「サバイバー」と思われる、親からの虐待や不適切な養育を受けてきた者もいる。これらの学生は、本人も自分の精神状況について十分に理解していない場合が多く、これまでにない緊張状態におかれたときに精神的に不安的になり認識されたり、大きな課題に突き当たった時に問題行動として発現したりすることがある。これらの学生は、厳しく辛い経験をうまく消化できず、自分の中で抱え込んでしまっており、本人はストレスを意識していなくとも、緊張が高まった時にフラッシュバックに襲われたりするため、肝心な時に頑張ることができなかつたり、感情の高まりを恐怖と感じたり、辛い経験を思い出さないようにしているため、周囲の理解を得ることが難しくなっていることもある。

他方で、虐待とまではいえないが、親からの不適切な養育の影響を強く受けている学生もいる。例えば、真面目でよくできるが、自分の意見や考えが全く述べられない学生や、過度に失敗を避ける、プレッシャーに耐えられないために、問題に向き合うことができず逃避傾向を示す学生などがいる。背景に親からの過度の期待や干渉、受験競争の影響などがあると考えられるが、中にはこれまで「親に一度も褒められたことがない」などといったケースもあり、自己肯定感の低さが、主体的な学び、特に教育実習での学びを制限してしまう側面もある。

授業における集団作りの工夫

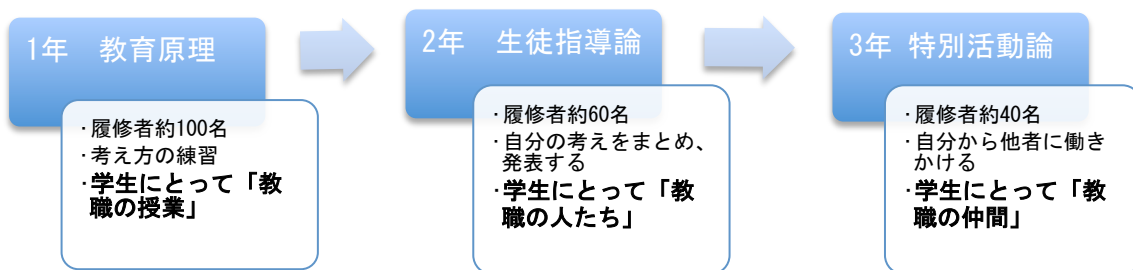
このような学生は、教員への相談や学生相談のカウンセリングの中で、状況が明らかになる場合があるが、全ての学生の状況について十分把握できているとはいえない。このよう

な学生は、教職課程に限らずかなりの数が存在しているのではないかと報告者は考えており、十分な配慮をするためには、従来の「集団」のイメージで集団を捉えるのではなく、全ての学生が配慮を必要としている個別的な存在であるという認識が必要であると考えに至った。

これまで、集団づくりの中で、インクルーシブ教育といえば、「マジョリティ（健常者）」「マイノリティ（障害者）」がともに学ぶ、という点に力点が置かれていたが、報告者は上述のような学生の状況から、全ての学生を個別的な存在として位置付け、それら多様な学生が包括されるにはどのような集団づくりが必要か、について検討するようになった。つまり教職課程のクラスに「どのような学生でも受容され包含されることによって、自らも他者を受容し、自分自身をも受容することができるような雰囲気」を醸成し、学生にとっても居場所となり自己肯定感、安心感を持ってもらうことができないだろうか、それによって、教職課程として求められる水準の達成に向けた学生の学びの土台とできないだろうかと考えた。このような考えをもとに、4年間かけて集団が出来上がっていくように各授業の授業内容を編成するようになった。具体的には、「授業への関心から仲間（他者）への関心へ」と移行していくようなイメージで授業をとらえ、まずは、授業に参加し教員の話をしっかり聞く「教員対自分」という次元から、徐々に「自分とこの人・あの人たち（仲間）と教員」というように、他者への認識を広げ、最終的にはホームルームクラスのように「教職の仲間」として他者を認識できるような課程運営の実現を目指している。

他者認識のための授業の工夫

各授業では、教職課程の履修を通して人間関係を広げていき、特に、他者（仲間）への認識をもってもらえるような機会を意図的に作ることに注力している。



他の授業	教育制度論	教育方法論	各教科教育法
	教職論	教育課程論	職業指導
	教育心理学	教育相談	教育実習（事前指導）

1年次では、教育に関する理論や基礎を中心に扱うため、グループワーク等の活動は導入しにくいですが、徐々に他者への興味・関心が高まるような工夫をしている。例えば、授業の中では、毎回A6サイズのコミュニケーションペーパーに簡単な授業の感想を記入してもらい、次回の授業のはじめに紹介し、授業へのフィードバックとして活用している。その際には、学生の素朴な疑問に答えることや、学生の経験が語られているものを意識的に選択し、同じ授業を受けている学生の中にこんな人がいるのだな、ということを理解してもらおうきっかけにしている。特に、多様な意見があり、一つ一つの意見が重要だという観点から、感想を紹介することになっている。

2年次では、ケースワークなどを利用して、自分の考えをまとめ、他者と交流する機会を設けている。ケースワークでは、「どう思うか?」という漠然とした質問ではなく「このケースの問題について具体的にあげなさい」「どのような点が最も大きな問題か?」というように、回答内容について限定することで、学生が答えやすくなるように工夫している。一度、自分で取り組ませたあとに、グループワークを行うことで、一度まとめた意見を交流することができ、グループワークの難易度を下げるという意図がある。これらの交流を通して、自分と同じ考えの人や全く違う考えの人など、様々な他者がいることを知ることが重要と考えている。

3年次では、多様な他者と対等に話ができるように、オープンな場での意見表明や議論の機会を設けている。例えば、30名ほどのクラス全体で一つの議題について話し合ったり、無作為に作ったグループで協力し合う課題を与えたりすることで、お互いの様々な部分を見、理解を深めていくことを目指している。

以上のように、それぞれの授業の設定されている年次や、集団の人数等に合わせて、徐々に学生間相互の認識を深め、集団が出来上がるように工夫を行なっている。

授業運営の工夫

授業者は、授業の中で、必要な内容を教えることだけでなく、集団がインクルーシブな性質を持つように、重点をおく箇所や、教え方の工夫を行なっている。特に、「何を教えるか? よりもどう教えるか?」に力点をおいて、授業自体が受容的な雰囲気をもつように、言葉遣いや授業の進行方向、課題の提出方法などを工夫している。以下に列举する。

①言葉遣いに気をつける

- ・ 言葉足らずになったり、誤解を招いたりしないように、レジュメの表記や説明には細心の注意を払う。(先入観、ジェンダー、思い込みの排除+ユーモアで楽しく)
- ・ 大事なことは、きちんとした文章に言い換え、何度も繰り返す。(口語と文語・敬語の切り替え)

- ・ 不適切な発言をした場合はその場で訂正し、謝罪する。
- ・ 具体的な話や関係する話ができるように準備しておく。(学生の不規則発言を流さないため)

②1年生から個別的な視点をもつ

- ・ 1年生の頃から、気になるレポートをチェックして学生相談の担当者、学科教員、教学職員と情報共有を行う。
- ・ 場合によっては、授業後呼び出して話をする。(基本的には話を聞く、否定しない。)

③個別学生を認識する

- ・ 2年生の頃には、学生の顔と名前を一致させ、折を見て声かけを行う。
- ・ 特に気になる学生については、学生相談、学科教員、教学職員と情報共有を行う。
- ・ 学生ごとの特性をおおよそ把握する(教職に向いていない学生の把握)

④学生の状況から授業を組み立てる

- ・ できる内容とできない内容(グループワーク、ロールプレイなど)を判断する。
- ・ 場合によっては、強引に指導する場合もある。
- ・ 学年によって、授業方法が大きく異なることもある。

⑤できるだけ説明する

- ・ なぜ、こういう課題をするのか、なぜこういった対応をするのか(特に1-2年生)丁寧に説明する。
- ・ 今なんのために何をしているのか、について自覚してもらう。その都度目的を確認する。
- ・ 重要な情報をきちんと学生に伝える努力をする。

⑥失敗をさせる、失敗をさらけ出す

- ・ 教師は失敗するもの(失敗上手であることが大切)という点を強調する。
- ・ この集団では失敗しても大丈夫、だれだって失敗する(※「やらかした」は禁句)し、失敗しても大丈夫だから頑張ろう、という指導。

以上のような工夫によって、できる限り、学生にとって居心地のよい集団づくりを目指しているが、課題も多く感じている。

現時点での課題と教員に求められている資質・態度

多様な困難をもった学生に対する授業づくりにおいて、現時点で感じている最も大きな課題は、マンパワーの不足である。学生の多様性は年々高まっているが、それら学生の多様性に対する教員の理解は未だ十分な状況にあるとはいえない。特に、理系学科における女性教員の比率の低さ、教員の学生理解をサポートする人的資源の不足が挙げられる。本学農学部では、女子学生の割合が30%を超えるにも関わらず、女性教員の割合は7%に満たない。また、本学の学生相談の体制は、カウンセリングに特化しており、教員の学生理解

を促すような支援はほぼない状況にある。学生の多様性に対応できる教員の資質・能力を高めていくこと、および、教員の授業づくりをサポートし、学生理解をうながす取り組みは喫緊の課題であるといえる。

多様な困難をもった学生に対応した授業づくりには、そのような授業づくりが大学に必要であり、学生理解の視点から授業改善を行う教員の実践に対して適正な評価を行う体制も重要であろう。現状では、大学教員の業績として研究業績が重視されているが、教育に対する評価の在り方についても検討する必要があるといえる。さらに、多様な困難をもった学生に対応するためには、教員自身の人権感覚も重要である。授業を通して、教員自身を持っている偏見や、思い込みが学生を傷つけることや、教員がアカハラやモラハラ等の加害者となることもある。多様な困難、傷つきを持った学生を対象として授業を行う大学教員には、これまで以上に、人権や倫理、青年の多様性について理解し、授業実践に反映できる力が必要だろう。他方で、教員として授業を行う限りは、評価権者として学生に向き合わなければならないため、学生に寄り添うという意味では、限界がある。その分、他の専門職と協働しながら学生指導にあたることが重要となるだろう。

これ以外にも、保護者との連携不足や学生への指導機会の不足、学生の生活に対する支援の不足など、様々な課題が挙げられるが、何よりも、教員が授業者として多様な学生に向き合っていく姿勢が求められているといえる。